

健全な平和説教を目指して 宮崎 誉

『キリストによる平和』編集総括に代えて

ホーリネス教団の説教者たちによる『キリストによる平和』を出版できることを、とても意義深いことと感じています。この説教集の編集は、日本ホーリネス教団の戦争責任告白（一九九七年）を、生きたものとして継承するために、既にホーリネスの教会でなされてきた、平和の福音を語る説教を共同研究しようという声かけがきっかけとなりました。また、平和神学や包括的福音の論文も調べました。そういった論文、説教、講演が徐々に集まり、第一歩として説教集を出版することになりました。ですから、この説教集は資料集という要素も持っています。将来的にはホーリネス信仰に立つ平和論を構築したいという展望を当委員会は持っています。

この説教集の第二部に松木祐三牧師と小林和夫牧師による二つの論文が掲載されています。この二つの論文は、今後ホーリネス教団における平和神学の構築のために、二つの重要なフレームを提供する文章と受け止め掲載しました。松木祐三牧師は、教団委員長として一九九九年に、包括的福音理解に立つ宣教について基調講演を行い、教団の伝道方針とされました。東京聖書学院の教授としての遺稿論文である「包括的な福音宣教」を掲載しました（註1）。松木牧師が、包括的な福音を、ローザンヌ誓約（ローザンヌ世界伝道会議、一九七四年）と沖繩宣言（第四回日本伝道会議、二〇〇〇年）の流れの中で、福音主義的な教会の取り組むべきこととして位置づけていることは大切です。小林和夫牧師は、和解の福音について語るなかで、贖罪論と和解論との関係を明らかにいたしました。これらの主張が、暫定的ではありますが、ホーリネス教団の説教者にとって、重要な教理的な枠を提供します。

また、福音主義の教会において、平和というテーマを、どのような軸足を持って説教することが良いか、説教集を編集する中で、見えてきたことを五つのポイントにまとめることにします。実践神学、平和神学、倫理学などの視点で、本来はより丁寧な考察が必要と思いますが、今回はできるだけ分かり易い表現で、厳選された資料のみを用いて簡略に記述することにします。

一・聖書から説教される平和

ここに掲載されている説教の多くは聖書を軸とし、講解説教の中で、聖書テクストの黙想の中から導かれて、「平和・和解」について解き明かされています。平和思想や平和運動が、聖書と離れたところで一人歩きをしているのではないということは大切なことです。

小林和夫牧師の説教の聖書神学的視点から学ぶことは、平和を旧約聖書のシャロームという救済の概念の中に位置づけていることです。そのシャロームは、単に争いが無い平穏な状態のみを表すのではなく、あらゆる側面における充足を意味します。また旧約神学では、イスラエル民族に啓示された救いのビジョンが、「シャロームの完成」というメッセージであつたということが明らかにされています（註²）。そのシャロームがイエス・キリストにおいて成就されたと伝えていきます。このように旧約聖書と新約聖書を貫いた救いのメッセージとして語られているのです。

二・キリストの救いとしての平和

包括的な福音理解において、大切なことは、福音の中心を見失わないことです。私たちの救いの中心は、主イエスの十字架と復活による救いです。救いは恵みにより信仰を通してもたらされます。そして、恵みによって救

われたものが、和解の使者として召されていることを聖書は語ります（Ⅱコリント五16〜21）。この順序が極めて大切です。この順序が逆になったり、救済なき倫理として平和を語るならば、福音を語る説教ではなくなり、それは礼拝にふさわしいものではなくなります。

また、この説教題にも明記されていますが、「キリストによる平和」ということを強調する必要があります。主イエスの贖いにより救われた者が、主イエスに従い生きる場所から、平和への歩みを始めるのが私たちの取るべき立場であると思います。ジョン・H・ヨルダーという神学者が、『にもかかわらず (Nevertheless)』というタイトルの本を書きました（註3）。そこには、二〇種類以上の様々なタイプの平和主義の基本原理が描写され、吟味され、課題点が指摘されています。キリスト者の平和主義といっても一つのタイプではないのです。その中で、キリストの福音を中心に集中するところから起る平和 (Christ-centric peace) を説教においては見出していく必要があります。

このことを明確にすることは非常に大切です。なぜなら、少し単純化しすぎた視点かもしれませんが、日本の教会は長い間、福音派であるか、社会派であるかという二つのスタンスを対立的にとらえてきました。しかし、聖書は内的な福音と社会に生きるということを二者択一とはしていません。中心は魂の救いです。そして、救われた者が御心に生きるようにと召されています。健全で包括的なバランスを保つことが重要といえます。

三．教会の歴史に根ざした平和理解

教会の歴史の中で、平和主義の流れを描写するためには紙面がたりません。教会史の初めの三〇〇年間、教会は平和主義であったと学者達は同意しています。しかし、ローマ帝国のキリスト教の容認以降、国家の影響により戦争が条件付きで容認されるようになっていきました（「正義の戦い論」）。以後、西洋キリスト教文化圏では

戦争容認が主流派となつていきました。しかし、歴史を貫くようにして、敵を愛し、非暴力に生きようとする人々はいました。修道士たち（中世）、アナ・バプテスト（一六世紀）、クエーカー（一七世紀）、そして、近代起こった二つ世界大戦の後に、急速に平和教会運動（Peace Church Movement）にコミットする者たちが世界規模で教団教派を超えて広がっています（註4）。

特にウエスレアンの流れにあるデューク大学で教えているウィリアム・ウィリモン教授（実践神学）やチャールズ・L・キャンベル教授（説教学）、またS・ハワーワース教授（倫理学）による研究は、同じウエスレアンの流れにあるホーリネス教団の信仰者にとつて、真摯に受け止めるべきものです。また、米国では六〇年代に公民権運動で説教を語り続けたM・L・キング牧師の説教集『汝の敵を愛せよ』（註5）、ヘンリー・ナーウエンの『平和への道』（註6）など、平和の説教集・論文集は、それぞれの伝統を超えて学ぶ価値のあるものだと思います。第二次世界大戦中に、ナチス・ドイツに対して信仰と説教とをもつて抵抗運動に取り組んだ、告白教会の働きも忘れてはいけないと思います。

四．ホーリネス教団の戦時中の歩みを踏まえた語り方

第二次世界大戦の最中、私たちの先輩はかつてない試練の中を通りました。迫害の嵐の中、壮絶な信仰の戦いを強いられました。その時代の人々のことを、現代の私たちが簡単に裁くことはできません。しかし、信仰の先輩たちが言葉と生き方によって残したメッセージは、私たちへの問いかけとして真摯に受け止めるべきです。戦後、私たちは、美化された英雄談という側面を語り継いできました。しかし、戦後、五〇年がたったときに、当時の裁判記録など多くの資料が掘り起こされてきました。それにより偶像礼拝を推奨し、戦争に協力してきた側面も明らかになりました。そのことへの悔い改めと和解の福音に生きる決意を明らかにしたのが、一九九七年の

「日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白」です(註7)。その告白を一回きりのものとするのではなく、その告白に表された福音理解に生き続けることが大切です。

過去の検証という時に、解釈をめぐって大きな問題となった聖書箇所は、ローマ人への手紙一三章1〜7節です。「すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神によらない権威はなく(中略)すべて神によつて立てられたものだからである。」この聖句が、戦時中に神社参拝と戦争協力を、日本人キリスト者に肯定させる言葉となりました。斉藤孝志牧師による説教「教会と国家の正しい関係」は、その問題に正面から向き合い、丁寧な聖書解釈を試みています。

また、過去の検証ということを考える時、かなり具体的な政治情勢を吟味することになります。この時に注意すべきことは、私たちが知っている情報はいつも、真実の一部でしかないことです。メディア解読力の大切さが言われていますが、大きな真実をメディアの中で、言葉や画像で表現される時に、それは小さな一つの側面としてしか伝達できません。私たちは謙虚になる必要があります。真実は加害者側と被害者側、主流派側と少数派、政府側と民衆側、国内の視点と国際的視点など、いくつもの主張の中で時間をかけて見出されていくものです。そういったことから、現在進行している政治情勢についての直接的な判断や批判などは、礼拝での説教という場では避けたほうが良い場合が多くあります。礼拝ではなく、小グループのディスカッションや専門家による講演会をするのは良いかもしれません。教会が混乱しないように配慮しつつ、丁寧に平和について語り、真実な生き方へと導くことが大切に思います。

五. 平和のビジョンに生きる

キリストによる平和の説教は、ビジョンを手渡す説教です。その代表例として、M・L・キング牧師による

「私には夢がある」という歴史的な意味をもつ説教をあげることができません。黒人と白人の子どもたちが、手に手をとって兄弟姉妹となり得る日がくるという夢を語った説教が、時代を変えていく力となりました。このような平和を作り出す説教は、語られている時には、儂い理想論と思われることが多いものです。キング牧師にもそう尋ねる人がいました。するとキング牧師はこう答えたそうです。確かに、自分は理想論を語っている。しかし非現実的な理想論ではない。最も現実的な理想論を語っている。平和のビジョンを語ることは、平和の夢を語ることは儂いことではないのです。なぜなら、どんなに酷い状況の中でも、そのビジョンだけが現実的な希望となるのであり、私たちは平和の祈りを祈り続けることが出来るのです。

この説教集に、車田秋次牧師の論説を掲載しました。その中で車田牧師は、厳しい弾圧の辛苦について語られました。その現実を覚えつつ、再臨の主を待ち望む信仰の言葉を語ります。「世界の『平和』は聖書が終始一貫、表示している通り、ただ独り、『平和』の主なるキリストの顕現による以外、他に絶対に方法のあり得ないことを有力に証明しておるといい得るであろう。」と語りました。聖書の言葉に信頼し、再臨のビジョンの中に、シヤロームの完成を見出したのです。迫害の現実よりも、もつと確かな現実として再び来られる主イエスを信じたのです。

その平和のビジョンは、まさしく聖書のメッセージといえるでしょう。黙示録の最後の場面に、勝利者として登場するのは、ほふられた小羊です。暴力や権力による支配ではなく、ほふられた小羊、十字架によって自らを捧げた主イエス・キリストの勝利が、聖書が語る救いの完成のビジョンなのです。このビジョンを私たちの心に確かなものとなる時に、目に見える現状がたとえどんなに困難であったとしても、真実に主イエスに従う歩みをひと足ひと足、進めることができます(註8)。下瀬牧師も、終末論的な平和のビジョンを説教しています。その説教で意義深いことは、「将来来るけれども未だ実現していない福音」としてではなく、み言葉が語られる

礼拝という場で、私達はシャロームの完成を先取りし前味わいをしていることが語られています。

まとめ

ここで取り扱った内容は、丁寧な説教分析や神学的考察を続けていく必要があると思います。しかし、ひとまず上記の五つの項目を、平和の説教を語る場合における暫定的な説教論的ポイントとして提示して、この文章を閉じることにします。また、教会の暦（降誕節、世界聖餐日、弾圧記念日等）の中で、平和の説教をすることは意義深いことであることにも触れておきます。キリストによる平和の説教が、健全に、そして福音的に語られ、キリストの体を建て上げるものとなるように切に願っています。恵みと平安を祈りつつ。

- 註1 松木祐三「包括的な福音宣教（ホーリスティックな宣教）」『論集 宣教』東京聖書学院編、二〇〇二年。
- 註2 ウイラード・M・スワートリー『平和の契約』東京ミッション研究所、二〇〇六年。
- 註3 J・H・Yoder, *Nevertheless*, Herald Press, 1971.
- 註4 A・クライダー「『キリスト教二〇〇〇年史』いのちのことは社、二〇〇〇年。
- 註5 M・L・キング、『汝の敵を愛せよ』新教出版社、一九六五年。
- 註6 ヘンリ・J・M・ナウエン『平和への道』聖公会出版、二〇〇二年。
- 註7 日本ホーリネス教団 福音による和解委員会 『日本ホーリネス教団の戦争責任に関する私たちの告白の資料と解説』日本ホーリネス教団出版局、一九九八年。
(<http://www.jhc.or.jp/jhc/senso.sekinin/index.html>)
- 註8 J・H・ヨルダー『終末論と平和』日本メノナイト教会協議会、一九六八年。